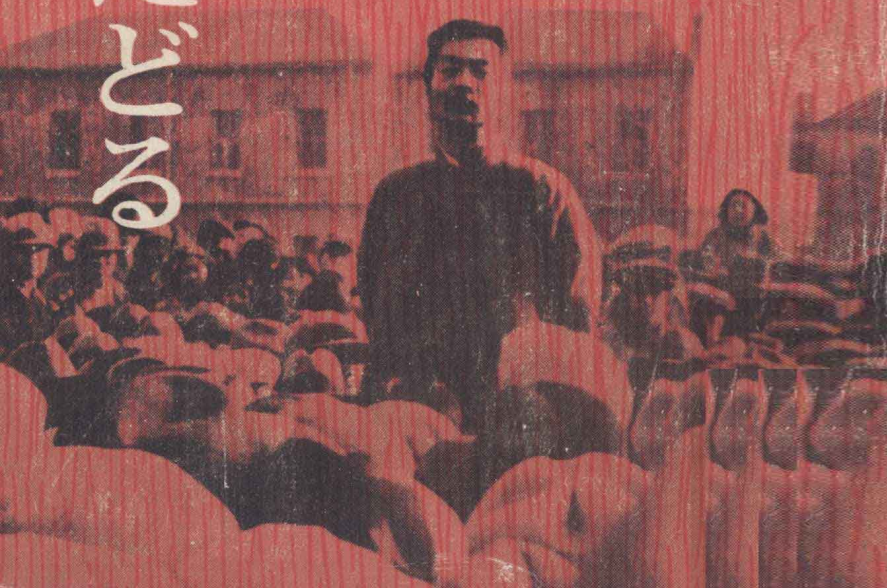
魯迅の足跡をたどる



魯迅の足跡をたどる

寒琴　著

外文出版社
北　京

魯迅の足跡をたどる

1979年　初版発行

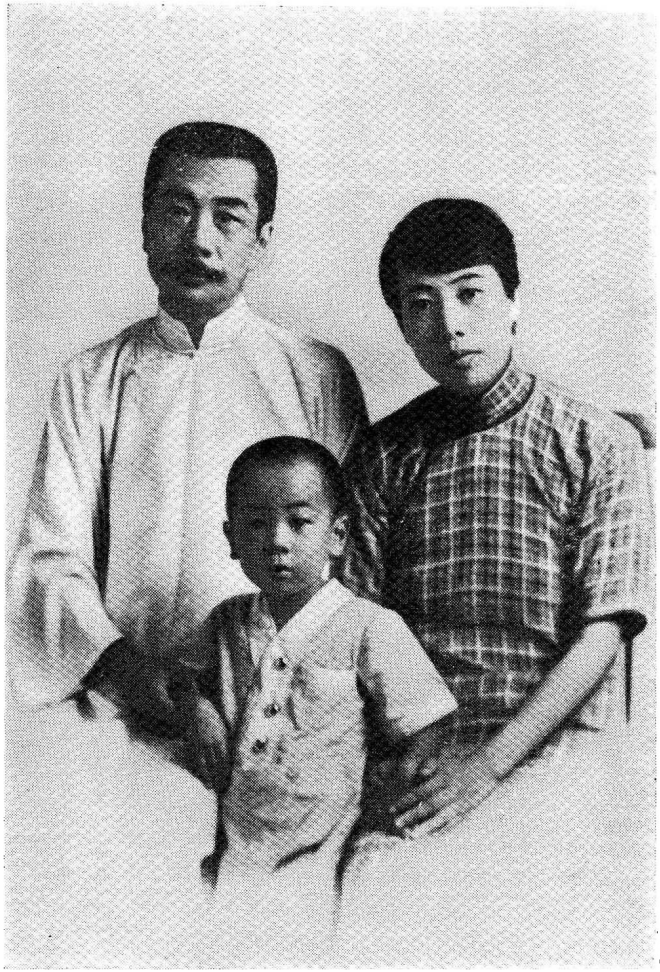
出　版　者　　外　文　出　版　社
（北京阜成門外百万莊）

発　行　者　　中　国　国　際　書　店
（北　京　P. O. Box 399）

取　扱　店　　東方書店(東京)亜東書店(東京)
中国書店(福岡)(株)内山書店(東京)
(株)満江紅(東京)朋友書店(京都)
(株)燎原書店(東京)中華書店(東京)

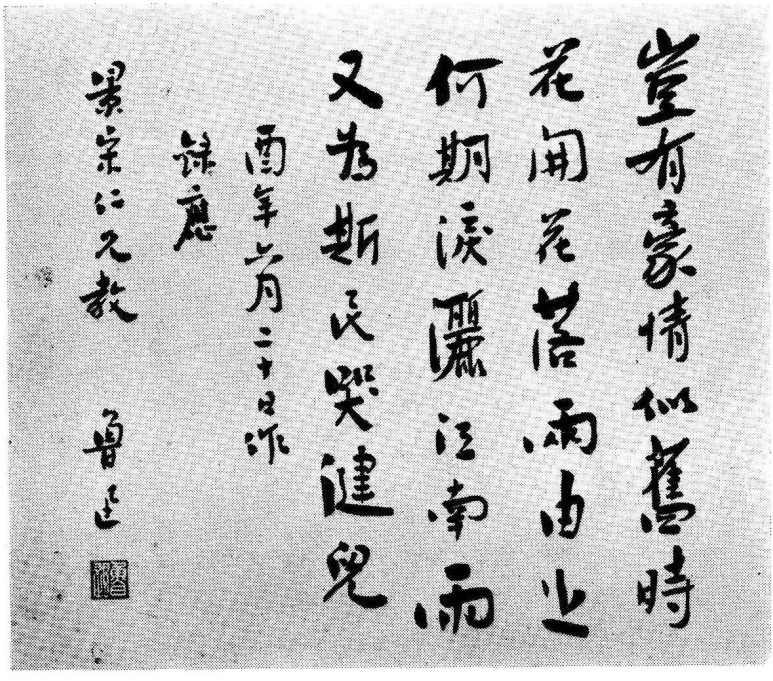
編号：（日）10050—950　　10—J—1493P
00085

1930年　魯迅、50歳の誕生日　上海にて



1933年　魯迅と夫人許広平、息子海嬰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook



魯迅の筆跡

目次

一　魯迅の故郷へ／新しい生活／魯迅の家
少年時代／農民と共に／どん底にあえぐ　……1
二　長江のほとりで／「魯迅中学」で／若き愛国者の探求……13
三　サクラと辮髪／誓いの言葉／孔孟の道と訣別
友情とはげまし／医学をなげうち文筆の道へ……22
四　密雲におおわれていた杭州／希望から苦悶へ
「秋風秋雨」の時代にあらず／紹興の誇り……31
五　北京での最初の寓居／「孔子を尊び、四書五経を学ぶ」ことに反対
鉄の部屋を打ち壊すたたかい／最初の春雷……40
六　革命の先駆者の命令を遵奉する／「大浪（おおなみ）、砂を淘（あら）う」
リアリズム文学の里程標／『吶喊』から『彷徨』へ……51

七　旧居――博物館／周海嬰さんの手紙
水に落ちた犬をたたきのめす／「民国いらい最も暗黒の日」……63
八　海は吼(ほ)える／墳と竜舌蘭／「奔月(ほんげつ)」の神話と現実
金銭万能の世界に抗して……75
九　無念だったすれちがい／生死をかえりみず道を選ぶ／血の啓発……84
十　厳粛と屈辱／蔵書と読書／真理の極限
「浮遊死体文学」とやくざ者政治……93
十一　暗夜がつづいたころ／託されて／同志として……103
十二　『八月の郷村』だけに矢を向けたのではない
心血の結晶／最後の瞬間まで闘う……113
魯迅の生涯・著訳略年表……122

一

魯迅の故郷へ　浙江省の省都・杭州を後に、わたしを乗せた汽車は魯迅の故郷――紹興に向かった。

窓外は見渡す限り緑の世界だ。緑の田畑、緑の村落、緑の山々、緑の清流……そして折から降りしきる小雨さえも、緑に染まっているかのように見える。この緑の大地の上に一つまた一つと横書きに大書されたスローガンが現われては、うしろに走り去る。「愚公、山を移す精神で、中国を改造しよう！」「祖国の山河を新しく造りかえよう！」「農業は大寨に学ぼう！」「プロレタリア文化大革命勝利万歳！」……田畑のあちらこちらに農作業にいそしむ人びとの群がみえる。その黄色のムギワラ帽子、色とりどりの衣服は、あたかも緑の世界を生きいきと飾る花のようだ。

永遠に春色あせぬこの大地をむさぼるように見つめているうちに、魯迅が自分の故郷を描写した文の一節をふと思い出した。

「……故郷へ近づくにつれて、空模様はあやしくなり、冷い風がヒューヒュー音を立てて、船のなかまで吹きこんできた。篷（とま）の隙間から外をうかがうと、どんよりした空の下に、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。……」

目の前の景色と、魯迅のこの描写は二つの時代のちがいをはっきりと表わしている。

列車はまるで緑色の海を航行する船のように疾駆する。一時間あまり経っただろうか、目の前にくっきりと浮かぶ島のように町があらわれた。

黒い瓦に白壁の家、赤いあずまや、かすかに煙のただよう煙突……、それらが緑の木々の間に見えがくれしながらしだいにはっきりと姿をあらわしてきた。

乗客の中から声があがった。

「紹興だ」

「魯迅の故郷だ」

新しい生活　紹興の魯迅記念館では章貴という名の同志が迎えてくれた。

章貴さんは四十三歳、浙江省東部の農民出である。かれは魯迅のことを、まるで自分自身の身の上話のようにくわしく語りだした。魯迅について熟知しているという点では、かれはいちぶの魯迅研究者をしのいでいるかも知れない。記者は紹興に滞在中、いつもかれと一緒だったので、だんだん打ちとけてきて、かれが魯迅の幼友だち――章閏水の孫だということもわかった。

章閏水は魯迅の『故郷』にでてくる閏土のモデルになった人である。

閏水は紹興のある農村の貧農の子どもで、魯迅と同じぐらいの年であった。かれは、魯迅が十歳をすこしこえた頃の春節(旧正月)、父親とともに魯迅の家に、臨時雇としてやってきた。

魯迅は閏水とたちどころに親しくなり、遊んだりして大の仲良しになってしまった。閏水

は、今まで聞いた事もないような珍しい話を魯迅にきかせてくれた。仕事がおわって、閏水が家に帰るだんになると、魯迅は大声で泣きだし、閏水も台所にひそんで目を泣きはらし、そこをでようとしなかった。この事からも、二人がどんなに深い友情で結ばれていたかをうかがい知ることができる。

しかし、魯迅がそれから二十数年後に、北京から紹興に帰り、閏水に会ったとき、様子はちがっていた。魯迅が「閏水さん！」と呼びかけたのに、閏水は、うやうやしげにかれを「旦那さま」と呼んだのだ。むごい搾取、生活の重荷は、閏水を木偶の坊にかえてしまっていた。魯迅は非常な悲しみに打たれると同時に、深く考えさせられた。かれはのちの世代の人びとが、再びかれと閏水のような関係におちいることのない新しい「生活」を送るようのぞんだ。

章貴さんの身辺に、わたしは、魯迅の期待した新しい「生活」を見出すことができた。かれの村はすでに日ましに向上する社会主義の新農村に変貌していた。かれは一九五四年から魯迅記念館の仕事にたずさわっている。学校にあがったことはないが、今では魯迅の作品を読みこなし、よく理解し、その上これについての卓抜した見解を披瀝する。共産党員となったかれは、記念館の指導的仕事を担当していた。また、現在北京中央人民放送局技術部門の責任者で魯迅の子息の周海嬰さんとも深い友情で結ばれている……。

魯迅の家　紹興は古い水の都である。解放

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

後、工場やビルがたちならび、町は大きく変容したが、住宅街は、やはり少なからず伝統的な色彩を保っている。町中、いたるところに川が流れ、その石岸の上には小さな家屋が軒をつらねている。黒い漆ぬりの門の奥まった大邸宅も見うけられる。門前の長い石段は、小さな川にかけられた石づくりの橋につづいている。往時においてはこのような邸宅は、社会的にひじょうに高い地位にある者とか素封家のみが持ち得るものであった。魯迅が生まれたのは、紹興の東昌坊にあるこのような大邸宅であった。

章貴さんにともなわれて記者は、魯迅が生まれ、幼、少年時代を過した当の邸宅を訪れた。

いまでは幅三十数メートルの街路が通じている東昌坊に、魯迅記念館がある。どっしりとした、中国の民族的特色ゆたかなこの建物はプロレタリア文化大革命のさなかに建てられたものである。中国の各地や外国からの参観者が毎日ひっきりなしに訪れるという。

魯迅の旧居は記念館のうしろにあって、いまなお昔日の姿を保っている。

旧居は五つの中庭をはさんだ幾棟かの建物と、それを巡る回廊からなっている。部屋は天井が高くゆったりとして明るい。だが、装飾のくずれ落ちた壁や漆が剝げて朽ちかけた対聯と横額が、とくに目につく。これは、省の文物部門の管理がゆきとどいていないからではなく、当時すでに魯迅の一家が落ちぶれていたことを示すものなのである。

魯迅の祖父・周介孚は、清朝時代に北京にあ

った翰林院で国史・図書の編纂の仕事をしていた。父親の周伯宜は科挙（官吏登用試験）に合格した秀才であった。もともと、周家は広い田地を所有した裕福な封建士大夫の家系であった。が、しだいに没落し、父親の代には四、五十ムー（一ムーは六・六六七アール）の水田をのこすだけとなったが、くらしはまずまずであった。魯迅は一八八一年九月二十五日にこの家で生まれた。

家族はかれに樟寿という名と豫山という号を与えたが、のちに豫才とか樹人とかに改められた。一九一八年にかれは北京で口語文の小説『狂人日記』を発表したが、そのとき、はじめて魯迅というペンネームを用いた。

少年時代　魯迅記念館からほど遠からぬところに「三味書屋」と呼ばれている建物がある。ここは魯迅が少年時代に通った私塾である。章貴さんはいま、この「三味書屋」のすぐとなりに住んでいる。ここへ見学にくる人はひじょうに多い。とくに青年、学生である。それは、かれらが崇敬してやまない魯迅が、少年の頃どのように学んだかを知りたいからである。

だが、魯迅は「三味書屋」に通う前、すでに自分の家で数年間にわたって「学問」を修めていた。かれの祖父の弟が『鑑略』という歴史書を魯迅に教えこんでおり、それを読めば、古今東西のおよそがわかるというわけだった。しかし魯迅は、「私はひとつもわからなかった」といっている。「三味書屋」というのはその頃、

紹興で最も厳格だった私塾で、四書五経の類を教えていた。「学んで優なるは則ち仕う」というわけで、当時こうした本をよく覚えこみさえすれば役人になることができたそうだ。しかし、魯迅は「わたしは孔孟の書をもっとも早くから、もっともよく読んでいたが、わたしが受け入れるようなものではなかった」と述懐している。

この、いわゆる「紹興随一の厳格な私塾」も魯迅と仲間の少年達をしつけることができなかった。かれは「三味書屋」で学んだ頃を思い出して、つぎのように書いた。

「先生が朗読に夢中になっている時は、私たちに好都合な時だった。数人のものは、紙ばりのカブトを指の爪にはめて芝居のまねをしている。私は絵を書く。『荊川紙』という紙を小説の挿絵の上に当てて、習字のときの敷き写しのようにして一枚一枚写した。読んだ本がふえるに従って、書いた絵もふえた。本はろくに読めなかったが、絵の方は成績がよかった。……」

今日、新しい教育制度のもとで学ぶ中国の青少年は、封建的教育に反発した往時の魯迅を、とりわけ身近なものに感じている。かれらは「旧い教育制度に魯迅はとっくの昔に造反していた」と感慨深げに語っている。

農民と共に　少年の頃の魯迅は、父親の封建的な倫理にもとづく説教がいやだったし、また私塾の老先生の孔孟の道の薫陶をきらっていた。かれは自分の目で世界を観察し、自分の頭で世界を認識しようとつとめた。そして、かれ

の祖母が話してくれる「猫は虎のお師匠さん」とか「白蛇姫が金山を水攻めにする」などの物語に大きな興味をそそられるのだった。また、女中の長媽媽（チャンマーマ）が買ってくれた、人面獣やら、九つの頭の蛇、一本足の牛……などいろいろな怪物の絵入りの本『山海経（がい）』をかれは一生忘れることがなかった。家の庭のうしろにある「百草園」と呼ばれていた所はかれの楽園だった。そこの花や木々、草や虫のどれもが、かれの心をとらえて離さなかった。しかしなんといっても、魯迅にとっていちばん忘れ難かったのは、母親の実家である田舎にいったときのことであった。

母親の実家は紹興から二十キロと離れていない安橋頭にある。記者は章貴さんの案内でそこを訪れた。

紹興の郊外はいたるところに湖と川がある。村は水上に浮かぶ小島、田畑は川のなかの緑の州にたとえられる。いまでは鉄道や自動車道路が四方八方に通じているとはいうものの、主な交通機関が船であることに変わりはない。人びとは野良にゆくときも、町に出るときも、農作物の取り入れをするときも、品物を運搬するにも、すべて小舟にたよっている。われわれも、小舟に乗って安橋頭にゆくことになった。

それは「烏蓬船」と呼ばれる小さな舟である。動かすことのできる黒い蓬（とま）で上をおおっているところからこの名がつけられたらしい。蓬の中には四、五人座ることができる。船尾に二

本の櫓があって、漕ぎ手は座って一本を手で、他の一本を両足であやつる。

この地方では老若男女を問わずだれでも漕げる。われわれの舟を漕いでくれたのはがっちりした体のおじいさんだった。悠然と漕ぐ手を休めないこの老人に、

「いくつになりますか？」

とたずねると、

「三十六の倍とちょっとだよ、それ位に見えるかね？」

といって笑った。

もし、章貴さんがうけ合わなかったら、かれが七十三歳にもなっているとは、とても信じられなかっただろう。魯迅のことをもち出すと、老人の面(おもて)には、親しみをこめた、そしてまた、ほこらしげな表情が浮かんだ。

かれは、

「魯迅が、おふくろ様の里にいたとき、わしゃ残念なことにまだ生まれておらんかった」

といった。

魯迅は十歳を少し過ぎた頃、毎年のように母とともにその実家でなん日かをすごしていた。安橋頭は海からほど遠からぬ辺鄙(ぴ)な水郷であった。そこには閏水と同じように純朴で聡明な農村の少年たちがたくさんいた。魯迅はかれらとミミズをほって川岸でエビを釣ったり、牛追いをしたりした。夜になると一緒に舟を漕いで宮芝居を見にいくなどした。これらの少年たちは百人中九十九人までが文盲だったが、魯迅はどんなことでもかれらからおそわろうとした。か

れらとの友情について、魯迅は二十数年後の回想のなかでも、心の底からあふれでることばでこれを言いあらわしている。魯迅の少なからぬ作品のなかに、こうした生活の追憶を見出すことができる。そして、これらの小さな仲間たちが、魯迅の心に刻みつけたものもまた、魯迅の精神形成の上に役立った。魯迅はつぎのように書いている。

「……私は町にある大家族の家で育った。小さい時から古書と師匠の教えを受けた。そのため苦しみあえぐ大衆を花や鳥と同じように見なしていた。いわゆる上流社会の虚偽と腐敗を感ずることがあっても、かれらの安逸で気楽な生活をやはり美しく思っていた。しかし、私の母の里は農村だった。それで時おり多くの農民と身近に接することができた。やがて私は一生涯、圧迫や多くの苦しみを受けるかれら大衆が花や鳥とは決して同じではないことが迫々とわかってきた」

どん底にあえぐ　安橋頭をあとにしたわれわれの小舟は、両岸に緑の額ぶちをはめこんだように水草がびっしりとしげった小さな川に出た。章貴さんは前方を指さして言った。

「あれが皇甫荘で、魯迅の母方の大叔父さんが住んでいた所です」

皇甫荘は非常に大きな村だった。瓦ぶきの高い大きな家があちこちに見える。村の入口には湖があった。岸辺に廟のような建物があったが、三方が水にかこまれ、一ヵ所だけ陸地に続いていた。一本のクスノキの老木が陽光を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook